

中古和文における「見えく」について

百留康晴

はじめに

中古の仮名散文には「見えあらはる」「見えありく」など「見え＋動詞」の形をとる表現（以下「見えく」とする）が散見される。しかし、中世の軍記や説話、日記などでは「見えく」はあまり見られなくなる。数の推移は中古異なり数二七、延べ数一二一に対し、中世異なり数五、延べ数三二、である。しかし、表一から動詞「見ゆ」自体の使用は中世において著しく減少しているようには見えない。そこで、中世における「見えく」の使用数の減少は「見えく」自体に内在する要因によって引き起こされたものであると考える。

その要因は中古の言語表現においては「見えく」の表現性が必要とされたが、中世においてはその必要性が薄れたというような語彙的側面に関係するもの、文構成等の変化により、「見ゆ」と結合できる動詞に制限が生まれたというような統語的側面に関係するものなど、様々

に考えられる。しかし、管見の限り先行研究はなく、実態もいまだ明らかではない。

そこで、本論では中古和文における「見えく」の意味構造を分析し、「見えく」が中古において生産的であった要因を考察する。そして、そのことは中古語の特徴を明らかにすることにもつながるだろうと考える。

表一 中古・中世における「見ゆ」の用例数

中世		中古	
保元	37	竹取	5
平治	45	伊勢	23
平家	237	土佐	12
方丈	4	平中	16
發心	79	落窪	54
閑居	42	蜻蛉	128
海道	15	宇津保	335
東関	22	大和	37
宇治	143	枕	181
十訓	57	和泉	14
十六	15	源氏	889
とはず	91	紫	56
徒然	60	夜寝覚	133
曾我	157	浜松	118
太平	469	堤	44
義経	83	更級	45
計	1556	狭衣	317
		栄花	624
		計	3031

一 中古における「見ゆ」の意味

先行研究や辞書の記述をもとに中古における「見ゆ」の意味を確認しておく。まず辞書の記述である。『岩波古語辞典 補訂版』には以下の意味が立項されている。

- ① 目にうつる。目に入る。
 - ② 見ることが出来る。
 - ③ 見つかる。存在する。
 - ④ 他から見られる。
 - ⑤ 人から顧みられる。世話をうける。
 - ⑥ 来る。いらつしやる。
 - ⑦ 見た目に…の様子である。…と感じられる。
 - ⑧ 他人に見せる。
 - ⑨ 姿を見せる。会う。
 - ⑩ 夫婦の交わりをする。
- 中古における「見ゆ」の用法は①②③の《視覚による把握》の意味を中心に④⑤⑧⑨のような《受身》《使役》の意味や⑥の《移動》、⑦の《認識・判断》の意味を含んだ用法にまで拡張していたことが分かる。
- 先行研究では大竹操（一九六九）が源氏物語の「見ゆ」を以下のA、Bに分類し、

A、視覚的、客観的な表現

「空見ゆ」「透影あまた見ゆ」の類

B、視覚でとらえた事態に、感覚的評価や思考判断を加えた、主観客観の総合的な表現

「美しう見ゆ」「いかに怖しからむと見ゆ」の

類

Aでは、単に事態が現象するというのではなく、見えている状態として事態を定着させるのが、「見ゆ」の働きであった、Bでは、登場人物あるいは作者の、主観的な評価、判断内容をも、単なる主観に終わらせず、あくまでも客観的なものとして提出する働きを認めることができた、とまとめられている。また、A・Bいずれの場合にも「見ゆ」と表現されることによって、対象を全体者の視点から、眺め、評価し、判断する立場が表出されることを確かめた、とする。

瀬戸屋里江（一九九三）は源氏物語における「見ゆ」を大竹の論を基に先のA、Bに分類し、「主観」「客観」という観点を持ち込み、また、主体と対象との関係を知覚主体、知覚対象、表現主体の三つに分け、考察した。九〇〇例程度の「見ゆ」の全用例中A対Bの比率は3対5で、Bの用例の方が数としては多いという興味深い指摘もあるが、「見ゆ」の意味分析において本論に関係する重要な点はAの用法における「見られる」や「見せる」と捉えられる用例の存在である。

瀬戸屋は1の例を示し、1は「自殺を試みた浮船が僧都達に助けられ、看病されて意識を回復する場面である。情けない姿^を、知らない人^に、介抱^されて、見られていたことを恥じる心理文である。このような形から、この「見ゆ」は受け身を表していることがわかる。知覚主体は「知らぬ人」、知覚対象は浮舟の「うきさま」で

あるが、表現主体は浮舟自身であり、見られることを意識しているのも浮舟である。」とする。また『源氏物語』中に「見る」の受身形として予測される「見らる」という語が存在しないことから、その役割を「見ゆ」が担っていたと推測する。

1 いかにかうきさまを知らぬ人あつかはれ、見え
つらんと恥づかしう、つひにかくて生きかへりぬる
か、と思ふも口惜しければ、
手習

さらに「受身と考えてよい例の中でも、その意が「見られる」よりも「見せる」に近いものも多くみられる」とし、2の例を「これは落葉の宮に、夕霧が様々に親切な気持（落葉の宮への想い）をお見せ申し上げたのに、その反応が冷たいため、情けなく思う心理描写の例であり、知覚主体は落葉の宮で、知覚対象は夕霧の情となっている」とする。

2 年ごろ人に違へる心ばせ人になりて、さまさまに情
を見えたてまつるなごりなく、心恥づかしげなれ
ば
鈴虫

瀬戸屋は2の例の「見ゆ」を「見られる」と解すると、あまりにも消極的な表現になってしまう。「見せ」という意が強く、動作的であり、主観的である。こ

のような例が心理描写の場面にみられるのもそのためではないだろうか。また、「たてまつる」という謙讓表現が付加されている例が圧倒的に多く、その場合の「見せるもの」は、その人の心であったり、本人自身であったりすることが多い。」としている。

「見せる」と解される「見ゆ」と「見せる」という意を表す「見す」の違いについては犬塚旦（一九七三）の「BがCにAを見せる」といった形において、「見ゆ」の場合、BにとってCは敬意を示すべき人の場合に用いられているが、「見す」の場合は敬語的性格を全く帯びない、「見ゆ」は、Aは常にB自身のものという感じが強いが、「見す」はAはBと離れた客観的事物の場合が多い、という指摘を引きつつ、「見す」はこちらが相手に一方的に「見せる」という行為を表しているが、「見ゆ」は見せられる側（見せる相手）を意識した、見せる側と見せられる側との間に位置する語である」としている。

以上の中古の「見ゆ」に関する辞書、先行研究の記述を踏まえ、以下で「見え」の記述を行っていく。

二 中古における「見え」の意味構造

前述のように中古において異なり数二七、延べ数二二一の「見え」が確認できた。確認された「見え」の例は表二に示した。そこで、動詞に前接する「見ゆ」がどのような意味で使用されていたのかという点から意味

構造の分析を進めたい。さて、分析の結果、「見ゆ」の意味は次の①～④に分類される。

- ① 《知覚》対象の存在を表現主体が視覚によつて把握しているということを表す用法。
- ② 《移動》対象が人である場合にその人物が本来いたところから知覚された場所に移動してくるといふ知覚前の段階における移動の部分に焦点が当たっている用法。
- ③ 《受身》知覚される対象が表現主体自身もしくはその一部で、対象側から知覚主体の知覚が表現されている用法。
- ④ 《使役》知覚される対象が表現主体自身もしくはその一部で、知覚されることを主体的に行つていると判断される用法。

表二 中古における「見え」

見えあらはる	紫 1
見えありく	竹取 1
見えおく	源氏 2
見えおこたる	蜻蛉 2
見えおほします	源氏 1
見えおほゆ	浜松 1
見えかはす	源氏 2 榮花 1
見えかよふ	宇津保 1
見えきく	浜松 2
見えきこゆ	宇津保 2 枕 3 紫 1 榮花 13
見えく	宇津保 1 源氏 1
見えさす	大和 1
見えさわぐ	宇津保 1
見えしらがふ	源氏 2
見えしる	宇津保 1 源氏 3 浜松 11 猿衣 1
見えすぐす	猿衣 1
見えとふ	蜻蛉 1
見えなす	紫 1
見えなほす	源氏 1
見えはつ	源氏 1 夜 1 猿衣 1
見えまがふ	源氏 5 榮花 1
見えまさる	源氏 1
見えまじる	宇津保 1
見えわかふ	浜松 2
見えわく	枕 1 源氏 3 紫 3 榮花 3
見えわたす	枕 1 源氏 3 浜松 1 猿衣 1 榮花 1
見えわたる	蜻蛉 3 宇津保 1 枕 2 源氏 11 紫 1 夜 1 浜松 1 夏織 3 猿衣 6 榮花 2

次に前接する「見ゆ」の意味別に「見え」の使用例を分類すると以下のようになる。これらから「見ゆ」が《知覚》を意味する「見え」よりも《受身》を意味する「見え」のほうが多いことが分る。このことは古代における「見え」の特徴であるように思える。

《知覚》 (7)

見えあらはる・見えおほゆ・見え聞く・見えさす・見えまがふ・見えまさる・見えわたる

《移動》 (7)

見えおこたる・見えおほします・見えかよふ・見え来・見え過ぐす・見えとふ・見えまじる

《受身》 (11)

見えおく・見えかはす・見え聞く・見えさわぐ・見え知る・見えなす・見えなほす・見え果つ・見えむかふ・見え分く・見えわたす

《使役》 (2)

見えありく・見えしらがふ

続いて右の分類ごとに「見え」の意味構造について記述していく。

3の例は作者である紫式部が賀茂の斎院に出仕している人たちと自分が出仕する中宮御所の人たちとを比較して述べているところで、斎院の人たちが自分達を軽く見るのも無理からぬところがあるが、他人を非難するのは簡単で、自分達のあり方に心を配るのは難しいはずなのに、そうは思わずに自分達は賢いと思ひ、他人を無視し

たり、世間を批判したりするところには齋院の人たちの心の程度が現れているということを述べている。

3 すべて人をもどくかたは易く、わが心を用ゐむことは難かべいわさを、さは思はで、まづわれさかしに人をなきになし、世をそしるほどに、心のきはのみこそ見えあらはるめれ。 紫式部日記 495①

この例で「見ゆ」は知覚対象「(齋院の人たちの)心のきは」の存在を知覚主体かつ表現主体である作者が知覚しているということを表している。対象が「あらわれ」るのは知覚されたことによるものであり、対象に関する《知覚・出現》という因果関係による連鎖が容易に読み取れる。《知覚》の意味で用いられている「見ゆ」と結びついた動詞はいずれも無意志的な変化を表し、全体が無意志的な変化となる。また「見ゆ」に後接する動詞は《思考・知覚》に関わる「おぼゆ」「きこゆ」、他の動詞に後接すると抽象的な意味になる「さす」「まさる」「わたる」などである。

4 の例は夫である狭衣の心が離れ、疎遠であった一品宮が狭衣の思いが残っている故飛鳥井女君の子を引き取って育てることになり、それをきつかけに狭衣が自分のところを訪れ、時間を過すようになったことを体裁が悪くつらく思っているという場面である。

この場合、「見ゆ」は《知覚主体が対象を知覚してい

る》ということではなく、《対象がその場に来る》という《移動》の意味を表していると考えられる。これは表現主体が知覚対象の人物が本来いたところから知覚された場所に移動していることを想定し、その知覚以前の移動の部分に焦点が当たっていることによるものである。「過ぐす」は《その場で時間を過ぐす》という移動後の行為を表している。

4 「たゞ、うつくしかりつるによりて、つれぐゝなるに、おかしき様に、生し出て持たらん」と、(一品宮は)思しつれど、「かばかりに見えま憂く、つらき人(狭衣)を」と思したるに、「いと、これ(飛鳥井女君の子)がゆかりばかりに、(狭衣は)心は空ながら、見え過させ給はん」と、人悪く物憂く思しなりにけり。 狭衣物語 287⑤

《移動》の意味に分類した「見ゆ」には「見えおこたる」のように《くすすることを怠る》のような補文関係の意味構造をとるものもあるが、概ね意志的な動作を表す動詞と結びついており、全体は意志的な行為の連鎖になる。また後接する動詞には「かよふ」「来(く)」「とふ」(訪問する)など《移動》の意味を含んでいる動詞も存在する。

5 の例は思いを寄せる雲井雁との仲を裂かれた夕霧が、雲井雁のことを忘れられず、他の女性に心が向かず、早

く高位に昇進して、昔の緑の袖の、六位の姿を見直してもらいたいと思う場面である。現代語の感覚からすれば「見直す」がふさわしいように思われるが、異本にもそのような例は見られない。ただし、池田亀鑑『源氏物語大成』によれば、別本系の本文で「見えなほされにしがな」となっている本文がある。この「見ゆ」は表現主体である夕霧が自らを視覚対象としてなされた表現で『受身』と見なすことができる。

5 「さるかたに、などかは見ざらむ」と、(夕霧の)心とまりぬべき(女)をも、しひて、なほざり事にしなして、なほ、「かの緑の袖を、見えなほしてしがな」と思ふ心のみぞ、やむことなきふしには、とまりける。
源氏物語 蛭 二437④

このような「見え」では意志的な動作を表す動詞が「見ゆ」に後接しているものが多い。しかし、同時に、6、7に示した例のように後接する動詞に助動詞「る」を伴ったものも多い。『受身』に分類した「見え」では「見えおく」「見え聞く」「見えさわぐ」「見え知る」「見えなす」「見え分く」「見えわたす」の7つがそうである。5の例に示した「見えなほす」も「見えなほされにしがな」となっている本文があったということとを併せ考えると後接する動詞が受身形であるほうが動作主体および対象が統一され、自然であるということであ

ろう。

6 「(紫上は)今はのとぢめにもこそあれ。いま更に(源氏は自分の)おろかなるさまを、(紫上に)見えおかれじとてなむ。いはけなかりし程より、あつかひそめて、見放ちがたければ、かう、月頃、よろづを知らぬさまに、過ぐし侍るぞ。

7 この国(播磨)の奥の郡に、人も通ひがたく、深き山あるを、としごろも占めおきながら、(明石入道は)「あしこに籠りなむ後、又、人には見え知らるべきにもあらず」と思ひて、源氏物語
源氏物語 若菜上 三・284⑫

8 の例はかぐや姫への求婚に失敗した貴公子たちが、なんとかかぐや姫と結婚しようと自分達の気持ちを見てもらおうとする場面である。ここでは貴公子たちの側から事態が叙述されており、知覚対象は貴公子たちの心ざし、知覚主体はかぐや姫、竹取の翁である。この場合『受身』を表しているようだが、知覚対象側には見られようとする積極的な意志と理由がある。そのため『使役』と解するのが適当であると判断した。

8 かゝればこの人々、家に帰りて物を思ひ、祈をし、願を立つ。思やむべくもあらず、「さりともしつゝに男あはせざらむやは」と思ひて、頼みをかけたなり。

あながちに心ざし見えありく。

竹取物語 3 1⑫

三 中古における「見えく」使用の背景

ここまで中古和文に見られる「見えく」の意味構造に関して記述を行ってきた。前述の通り、中世以降これらの表現は使用されなくなり、「見えあふ」「見え来」「見えそむ」「見え分く」「見え渡る」を見出すのみである。このうち「見えあふ」「見えそむ」は後接した動詞の意味が《互いにくをする》《くをし始める》のように抽象的になっていることで生産されたという可能性がある。また残りの「見え来」「見え分く」「見え渡る」は中古から引き続き使用されているものである。このことから「見えく」の中世における生産性が中古におけるそれと比較して著しく低下していることが窺える。中古では中世以降と比べ、「見えく」は生産的であったが、以下で「見らる」の未発達、「見く」との関係「敬意表現」という三点からその背景についての説明を試みたい。

中古和文における「見えく」には6、7に示したような後接する動詞が受身の助動詞「る」を伴っている用例が目についた。そして、それは「見ゆ」が「見られる」のような《受身》の意味で用いられている「見えく」に集中している。「見ゆ」の「ゆ」は従来、上代の受身・自発の助動詞「ゆ」に由来するとされているが、このこ

とと瀬戸屋の「源氏物語」において「見る」の受身形「見らる」が存在せず、その役割を「見ゆ」が担っていたのではないかという指摘とを併せ考えると、6・7における「見えおかれじ」「見え知らるべき」のような例は「見られおかれじ」「見られ知らるべき」と同様のものと思われる。これらの表現では「見えく」となっているものの、それは当時「見らる」が未発達であったため、実質的には動詞の受身形の連接したものであるということである。またその背景には現代とは異なり、動詞間の結び付きが緊密ではなかったということがあるだろう。

また、「見ゆ」が《受身》と取れる「見えく」には「見えむかふ」以外、「見えおく」に対して「見おく」、「見えかはす」に対して「見かはす」のように同じ動詞を後接する「見く」が存在している。このことは「見えく」という受身表現が「見く」に対応したことを示す傍証となろう。

しかし、「見ゆ」が《受身》と取れる「見えく」には後接する動詞が受身形ではない「見えく」も存在する。それらについては対象を「見る」ことを避け、「視覚主体に見える」すなわち「見られる」というように婉曲的に表現したものであると考える。つまり、「見る」を「見ゆ」に変えることによって視覚主体側への心理的距離、または敬意を含んだ、一種の婉曲表現となっているのである。

例えば「見えかはす」は源氏物語において二例使用されている。そして、後接する「かはす」は受身形にはなっていない。この「見えかはす」は9、10に示したように二例とも紫上と明石上との行為を表している。紫上から見た明石上は光源氏をめぐって心理的な距離、対立などを有する存在である。一方、「見かはす」は同じく源氏物語において二例使用されているが、11、12に示したようにいずれも源氏と夕顔、薫と浮舟という親密な間柄で使用されており、両者の心理的距離は近いと言える。

9 対のうへ(紫上)は、まほならねど、(明石上と)見えかはし給ひて、(明石上を)さばかり許しなくおぼしたりしかど、今は、宮(若宮)の御徳に、(明石上と)いと、睦ましく、(明石上を)やむぐとなく思しなりにたり。

源氏物語 若菜上 三二八三⑩
10 (紫上が)さばかり「目ざまし」と、心おき給へりし人(明石上)を、今は、かく許して、(互いに)見えかはしなどし給ふも、「女御(明石女御)の御ための眞心なるあまりぞかし」と(源氏は)おぼすに、いと、ありがたければ、

源氏物語 若菜下 三三六一⑩
11 (源氏は)たとしへなく、しづかなる夕の空を眺め給ひて、「奥の方は、暗う、ものむつかし」と、

女は思ひたれば、(源氏は)端の簾垂を上げて、(源氏と夕顔とは物に)そひ臥し給へり。夕ばえを見かはして、女も、かゝる有様を、思ひのほかに怪しき心地はしながら、よろづの嘆き忘れて、(源氏に)少し、うちとけ行く氣色、いとらうたし。

源氏物語 夕顔 一四四五⑨
12 宇治橋の、はるぐくと見渡さるゝに、柴積み舟の、所くに行きちがひたるなど、ほかにて目馴れぬ事ども、取り集めたる所がらなれば、(薫は)見給ふ度ごとに、猶、(大君の)そのかみの事の、たゞ今の心地して、いと、かゝらぬ人(浮舟のこと)を、見かはしたらむだに、珍しき、なかのあはれ、多かるべき程なり。
源氏物語 浮舟 五二三三③

「見えかはす」「見かはす」はいずれも《互いに見る》という行為を表している。しかし、動作主体二人の間柄やそこにある心理的距離の遠近は異なっている。そこで、「見えかはす」は相手に対する心理的な距離や儀礼的な敬意を含んだ「見かはす」の婉曲的な表現と見ることができると考える。このように中古において「見えく」が使用された背景には《受身》ということに関連し、一種の婉曲表現として用いられたということもあるのだろう。

したがって《受身》と分類した「見えく」は動詞の受身形が連続した「見られくられ」となるべき「見えく」

と受身的、かつ知覚主体と心理的な距離を置いた、「見え」の婉曲表現としての「見え」を含んでいると考えられる。そして、これは中古において受身の「見らる」が未発達だったということに起因するものであろう。

《使役》と分類したのもも主体の意志性が強いことを除けば視覚対象側から受身的に捉えられているという点で《受身》と共通する構造を持っている。したがって視覚主体に対する敬意を含んだ婉曲表現であるという点は《受身》と分類した「見え」と共通している。

同じく《移動》と分類した「見ゆ」も相手の移動を、知覚主体の知覚として表現したものと敬意表現の一種と考えることができる。現代語においても「先生が見えた」や「先生がお見えになった」などと「見える」を「来る」の尊敬表現として用いているのと同様のことがある。

13 の例は生活に困窮する母子の生活を打開するため、子の仲忠が山奥へ分け入り、生活の糧と住む場所を得、その後母に屋敷を出て山奥でもともに生活することを勧めたことを受け、母が子に述べた言葉である。わが子の行くところにはどこへでも行かないことがあるか。里に住んでいてもあなたより他に訪ねてくる人がいるのならともかく、という内容である。仲忠の「行く」という行為には「います」という尊敬語を用いており、この場合「見え通ふ」も敬意を含んだ《移動》の表現ではないかと見るができる。

13 「何にかは。わが子のいませむ方には、いづちもいづちも行かざらむ。里に住めども、吾子よりほかに見え通ふ人のあらばこそ」とて出で立つ。

宇津保物語 俊蔭

また、14 の例は中納言実忠は今人は人に会つたり、交際したりなさらないのだが、仲忠が琴を演奏することを聞き、ぜひその演奏を聞きたいと思ひ、仲忠に聞きたい旨を告げるという例である。尊敬語「たまふ」が共起していることから中納言は尊敬語を使うべき存在であり、「見ゆ」を《移動》を表す敬意表現であると捉えることは自然である。

14 新中納言、今は人にも殊に見え交じりたまはぬを、かくなど聞きたまひて、

夜のことならば、忍びて参らまほしくなむ承る。とて、

死にかへり思ひそめにし世の中の飽かぬことこそあはれなりけれ

とあり。宇津保物語 楼の上 下

以上の考察で「見ゆ」の用法から《移動》《受身》《使役》と分類した「見え」は中古における受身形「見らる」の未発達と敬意表現の発達とを背景として生産されていたということが明らかになった。中世になり

「見え〜」が生産的でなくなるのはこのような中古における「見え〜」の生産に関わる背景が消滅したためである。

四 まとめ

本論では中古和文における「見え〜」の意味構造を分析し、中古において「見え〜」が生産的であった背景を考察した。その結果、中古における「見え〜」の多くは受身形「見らる」の未発達と敬意表現の発達とを背景として生産されていたことが明らかになった。中世において「見え〜」が生産的でなくなるのは右のような中古における「見え〜」の生産を促進させる背景が消滅したためであり、また、これらのことは中古における「動詞+動詞」が現代の複合動詞よりも動詞間の結合が緩やかで連語的であったことを示唆している。

「見る」に関しても中古において受身形「見らる」が用いられていなかったのだとすれば、いつ頃から用いられるのか、どのように発達していくのか、「見ゆ」の《受身》の用法とはどのように関連しているのか、など明らかにすべき課題は多い。全てを今後の課題としたい。

付記

本論は科学研究費補助金若手研究(B)二二七二〇一八一の助成を受けてなされた。

参考文献

- 大塚旦(一九七三) 「『見ゆ』の用法について」 『王朝美的語詞の研究』 笠間書院
- 大竹操(一九六九) 「源氏物語における視覚的表現の意義―「見ゆ」を通して」 『女子大國文』 四二二
- 瀬戸屋里江(一九九三) 「『見ゆ』考―『源氏物語』の用例について」 『山口国文』 一六
- 田中聡子(一九九九) 「動詞「見える」の多義化とレトリック」 『岡崎学園国際短期大学論集』 六
- 田中聡子(二〇〇二) 「視覚表現に見る視覚から高次認識への連続性―視覚の文化モデル―」 『言語文化論集』 二二―二一

用例収集に使用した資料一覧

【中古】

- 『竹取物語』 『伊勢物語』 『平中物語』 『落窪物語』
『大和物語』 『枕草子』 『和泉式部日記』 『源氏物語』 『夜の寝覚』 『浜松中納言物語』 『堤中納言物語』 『狭衣物語』 『栄花物語』 (以上日本古典文学大系) 『土佐日記』 『蜻蛉日記』 『紫式部日記』 『更級日記』 (以上新日本古典文学大系) 『宇津保物語』 (『うつほ物語の総合研究1本文編』 勉誠出版)

【中世】

- 『保元物語』 『平治物語』 『方丈記』 『宇治拾遺物語』 『徒然草』 『曾我物語』 『義経記』 (以上日本古

典文学大系) 『平家物語』 (新日本古典文学大系)
『発心集』 (『発心集本文・自立語索引』清文堂)
『閑居友』 (『閑居友本文及び総索引』笠間書院)
『海道記』 (『海道記総索引』明治書院) 『東関紀
行』 (『東関紀行本文及び総索引』笠間書院) 『十訓
抄』 (『十訓抄本文と索引』笠間書院) 『十六夜日
記』 (『十六夜日記校本及び総索引』笠間書院) 『と
はがたり』 (『とはがたり総索引(本文編)』笠
間書院) 『太平記』 (『土井本太平記本文及び語彙索
引』勉誠社)

(島根大学教育学部准教授)